

I. ホスピス緩和ケアを支えるボランティア活動

10. 家族と遺族への傾聴ボランティア—岐阜中央病院の取り組み

加藤 允啓^{*1} 加藤 晶子^{*2} 上村 淑子^{*1} 西村 幸祐^{*3}

(岐阜中央病院 ボランティアグループ「りぼん」^{*1} 同 ボランティアコーディネーター^{*2} 同 緩和ケア病棟^{*3})

はじめに

岐阜中央病院緩和ケア病棟でのボランティア活動の紹介をする。特に、家族や遺族に対する傾聴の活動を中心に、それぞれのボランティアスタッフが分担執筆した。読者の皆様のお役に立てることがあれば幸いである。

活動の歴史

1999年5月に岐阜中央病院の緩和ケア病棟が開設された。開設には、市民グループ「ぎふホスピス運動をすすめる会」の署名活動が大きな実を結んだ経緯もあり、直後からボランティア活動が開始となった。ボランティアの介入に際しては、多少の戸惑いがあった。ボランティアに何をしてもらうのだろう、ボランティアは何をすればいいのだろうとスタッフもボランティアも迷いながらのスタートだった。ボランティア同士の間にもそれぞれの想いの違いから対立することもあり、去って行った人もいた。

最初はその“すすめる会”のなかのボランティアグループ“そよかぜ”のメンバーばかりであったが、やがて他所からもボランティアを志望する申し入れがあり、3年後に病院独自のボランティアグループ“りぼん”が誕生した。これを機にボランティアコーディネーターが介在し、約束事が取り決められた。ボランティアとして活動するにはホスピスへの理解や学びを必要とするのでボランティア講座を毎年開催するようになった。

自分の想いが非常に強い人は、つい相手に自分の想いを押し付けてしまいがちである。ここで“私が癒してあげよう”と構えて来る人は、長続



図1 音楽とティーサービス

きしない。さりげなく相手の気持ちに寄り添えるような人が求められる。

現在のメンバーは、当初からのボランティアをはじめ、ボランティア講座を受講後に入会した人、インターネットなどで調べて申し込んできた人、大切な人をこの病棟で看取った後に入った遺族、ホスピスを希望しながら入れずに看取った人など、いろいろな方が入会されている。

最初は、花の水替えとティーサービスがおもな活動であった。ティーサービスは、もともとワゴンを引いて病室を回っていた。そのうちに音楽が加わるようになり、“喫茶”として週に1～2回デイルームでお茶を飲みながら、音楽を楽しむようになった(図1)。

フットセラピーやアニマルセラピーをはじめとする癒し系の活動もあれば、絵手紙や編み物、折り紙などの趣味の時間の提供、ベランダの園芸や熱帯魚の世話、外来の方の病棟案内など、年を経るごとに活動にも幅ができた。毎月の行事の手伝いもボランティアの仕事になり、季節を感じられるように毎回、趣向を凝らして会場づくりに励んでいる(図2)。

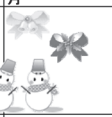
日	月	火	水	木	金	土
		1  フットセラピー	2  ティーサービス Xmasリース作り	3  音楽広場	4  ホットサロン	5  ホットサロン ホットサロンはご家族が笑顔にくつろいで頂く場所です。ファミリーダイニング前の多目的室にてご自由にお過ごしください。
6	7  ピアノとともに	8  ヒーリングタッチ	9  折り紙	10  小さな音楽会	11  ホットサロン 絵たより	12  アニマルセラピー
13	14  音楽広場	15	16  ティーサービス	17  ギターのひととき	18  ホットサロン	19
20	21  整髪 カラーセラピー (塗り絵)	22  ヒーリングタッチ	23  病棟行事 クリスマス会	24  ピアノとともに	25  ホットサロン	26  アロマセラピー
27  アニマルセラピー	28 	29  ⇒ディールームにて音楽とともに、コーヒーやお抹茶などをお楽しみください。もちろんお部屋でもOK！ ⇒お部屋にコーヒー等をお届けします。	30 	31 		

図2 12月 くつろぎタイム

他にも、患者さんや家族の話し相手を求められたり、売店などへの付き添いを頼まれたりもする。付き添う家族にくつろいでいただけるようなサロン(ホットサロン、後述)を開いたり、グリーンケア(遺族会、遺族の思いを語る会、後述)もボランティアが中心になって行う。単なる話し相手として時間を共有することもあれば、人生の深い部分・スピリチュアルな面での話になることもある。「本当にこれでよかったのだろうか」「もっとしてあげられることがあったのではないか」と自責の念に駆られる遺族の声に、ボランティアはゆっくり時間をかけて傾聴することができる。

押しつけがましくなく、病棟のなかでごく自然に社会の風を運んでくれるボランティアは大切な存在となっている。理想は、「必要とする時にその場に居る」という状態である。

傾聴の活動

① 活動の中のさりげない会話

1. フットセラピー、整髪、ヒーリングタッチ、アロマセラピー

マッサージや髪のカットをうけている間、ボランティアと家族はさまざまな会話をする事になる。

る。ありふれた世間話から思い出話まで、ボランティアは相槌を打ちながら聞き役を担う。

2. 病棟案内

外来初診時には、病棟案内を行うが、その役目もボランティアが担っている。その際、特に家族は、ボランティアに今までの苦難の経過を語られることがある。そんな傾聴もある。

3. 折り紙・編み物

手作業をすることで、家庭で過ごすような時間を取り戻していただいている。この時にも、ほそほそと、気持ちを伝えられることがあり、ボランティアは耳を澄ます。

4. 絵便り・音楽活動・カラーセラピー

非言語の表現を自ら行ったり、患者さんやご家族の聴覚に訴えることにより、思い出につながるきっかけとなって、さまざまな思いを打ち明けられる。また、涙を流されたりする傍らで、寄り添わせていただいている。

② 傾聴を意識したはたらき

1. ホットサロン

次に述べる“遺族の想いを語る会”などで「ブレ・グリーンワーク」の必要性を感じて、また介護に疲れてしまった家族に“ホット”していただ



図3 遺族の想いを語る会

こうという趣旨で始まったサロンである。週に1回、1時間ほど病棟内の多目的（会議）室を開放し、入院中の患者さんの家族を対象者として、茶菓子などとともに自由に会話する時間を提供している。

自由参加で、参加者が多い時には世間話などになるが、少人数の時には深い心情を吐露されるので、しっかり耳を傾けている。患者さん自身が参加されてしまうこともあり、しかし、それはそれで井戸端になり、“ホッと”できるサロンになっている。

2. 遺族の想いを語る会（図3）

月に1回（土曜日）、2時間ほど緩和ケア病棟を離れた院内の1室で、茶菓子を囲んで、遺族がさまざまな想いを語られるのを伺う。退院後3カ月を経過した遺族に開催案内の葉書を送り、参加を希望される方をお迎えする。事前に出欠席を確認しないため、参加者の多寡はある。3人のボランティアが役割分担し、①ファシリテーターとして全体を牽引する、②相槌を入れながら遺族の言葉を補足したり、反映・尊重・促しをする、③お茶などの接待・寄り添いをする、というチームワークである。

ただただ黙って聞き続けておられる遺族がいた。息子さんを亡くされたのだが、ご主人の話・息子さんがかわいがっていた猫の話などはされるが、息子さんのお話はされなかった。現在も参加を継続されておられる。ボランティアは、そのまま見守らせていただいている。

同時期に奥様を亡くされた4名のご主人たちがそろい、それぞれが思いを語ったり、聞き役に回ったり、表情が良くなったと観察されたことを述べられたりなどなされている。現在も不定期で参加されている。

ご主人をなくされた女性は、初めの2回目までは「何もする気にはなれない」と話された。3カ月後に3回目に参加された時には同じ境遇の人が同僚にいたこと、仕事に出られるようになったことを話された。

今後の課題

緩和ケア病棟の歴史と傾聴のボランティアの活動について述べた。同じ立場の方のお気持ちを聴くことが癒しになっている場面もあり、これらの活動は非常に重要であると思う。

ホッとサロンにしても、遺族の想いを語る会にしても、参加されるのはごく一部の方である。もっと多くの方々が援助を必要としているかもしれない。遺族になられると、病院自体に足を運べないご家族も多々いると聞く。ボランティアの活動が存在することをもう少し知っていただく工夫や、活動を院外でも広げることが必要であろう。

いずれにせよ、地道に細く長く続けるなかでゆっくりと着実に根づいてきたこれら“りぼん”の活動を、応分の責任を果たしつつしっかりとこれからも続けていこうと思う。ささやかでも、さらに良い援助ができるように努力していきたい。